

関西自然保護機構（KONC）2014年大会

プログラム・講演要旨

日時：2014年2月23日（日）	10：00～16：30
会場：大阪市立自然史博物館	本館 講堂・ナウマンホール
プログラム	ポスター掲示（10：00～16：30）
10：00～10：45	2014年度 総会
10：45～11：00	2013年度 四手井賞 授賞式
11：00～11：30	四手井賞授賞記念講演
11：30～12：30	ポスター発表 コアタイム
13：00～14：15	口頭発表（2013年度研究助成事業研究報告会）
14：30～16：30	シンポジウム「大阪府のレッドリスト改訂について」

ポスター発表 講演要旨

P01 「大阪自然環境保全協会における環境保全人材育成活動」

湯浅淳子・倉光英正・山本 哲（公益社団法人大阪自然環境保全協会）

大阪自然環境保全協会（身近な自然を愛し、これを守り育てたいと願う市民が運営している民間の自然保護団体）では、自然環境の保全や調査研究、観察会等の実施とともに、そのような活動を推進することのできる人材の育成にも力を入れています。本発表では本協会の概要とともに、本協会が実施している人材育成講座、特に自然環境市民大学の内容について報告します。

P02 「吹田市のニュータウンに残された小っちゃい草原の植物相と植生」

横川昌史・長谷川匡弘（大阪市立自然史博物館）

大阪府の吹田市のニュータウンの中に、公有地であるが特に利用がされないまま40年以上草刈りが行われてきた小っちゃい半自然草原が残されている。このような都市部に残された「塩漬け草原」において、植物相と植生を調査した。その結果、ウツボゲサ、ツリガネニンジン、ワレモコウといった草原に生育する植物が多数出現し、都市部に残された小っちゃい草原であるが草原性植物の生育地として機能していることがわかった。

P03 「タケ類テングス病を発症した竹林の特徴」

河合洋人・栗屋善雄（岐阜大学・流域圏科学研究センター）

近年、竹林の拡大現象が報告されるとともに様々な問題が生じている。そのひとつにタケ類テングス病の蔓延が挙げられている。そこで岐阜県において調査をおこない、発症状況の確認と発症した竹林の特徴について解析をおこなった。その結果43%の竹林がタケ類テングス病を発症していた。また発症した竹林はマダケで稈密度が高いという特徴を持っており、このような特徴を持つ竹林は発症しやすい可能性が示唆された。

P04 「奈良県東吉野町平野川における魚類の生息環境と多様性」

和田恭典・中埜将太・鶴田哲也（大阪産業大学・人間環境）

奈良県東吉野町の平野川とその4支流で、流域環境と魚類の種多様性の関係を調査した。その結果、堰堤等の河川

工作物の多い支流では魚類の生息種数が少なかった。これは、堰堤による遡上阻害や土砂の堆積による浮石の減少が原因であると考えられる。また、河川に沿って新しい林道のある支流ではタカハヤとトウヨシノボリの生息密度が著しく高かった。これは、林道建設にともなう河畔林の伐採が河川への日照量を増加させ、河川の生産性が増大したためであると考えられる。

P05 「大阪府南部の農業用ため池におけるオオクチバスの食性と成長」

水田早苗・平井規央・石井 実（大阪府立大学・生命環境）

特定外来生物であるオオクチバスによる河川や止水域の生態系への影響は著しい。本研究は、大阪府南部の里山林に隣接した農業用ため池に侵入が確認された本種の生息状況を調査し、食性や成長について明らかにした。調査の結果、本調査地に生息している本種は、主に水生昆虫や甲殻類、動物プランクトンなどの水生動物等を捕食することで生出し、寿命は短いと考えられた。

P06 「淀川城北ワンド群におけるオオクチバス仔稚魚の食性変異」

中埜将太・和田恭典・木邨建志・山下幸裕・鶴田哲也（大阪産業大学・人間環境）

淀川城北ワンド群の外来魚駆除圧の異なる4カ所のワンドにおいて、オオクチバス（以下、バス）仔稚魚の食性を調査した。その結果、駆除圧の低いワンドのバス仔稚魚は多様な餌生物を利用していたのに対し、駆除圧の高いワンドでは主に魚類と大型甲殻類を餌として利用していた。これは、駆除圧が低く外来魚の生息密度の高いワンドでは、バス仔稚魚の餌資源が不足していたためであると考えられる。このように、バス仔稚魚は餌環境に合わせて食性を変化させることが可能であることから、本種は成魚だけでなく仔稚魚の時から在来生物群集に多大なる影響を与えていると考えられる。

P07 「大阪府の小河川におけるヌマムツの個体群動態」

松岡 悠・平井規央・片山庸平・石井 実（大阪府立大学・生命環境）

ヌマムツ *Candidia sieboldii*（コイ科）は、9府県でレッド種として扱われている。本研究では本種の保全を目的として生活史形質を明らかにするため、大阪府の石津川支流で個体群動態調査を行った。本種の成長速度は比較的早く、孵化から2年目には繁殖に参加している可能性が推察された。

P08 「大阪府におけるウキゴリの分布と遺伝的多様性」

原 仁志・平井規央・石井 実（大阪府立大学・生命環境）

ウキゴリ *Gymnogobius urotaenia* の保全を目的として分布調査と遺伝子解析を行った。本種のため池における遺伝的多様性は河川と比較して低かったことから、その間の遺伝的交流は低頻度である可能性が示唆された。

P09 「外来種クロガケジグモの分布：奈良県での発見から36年」

関根幹夫

オーストラリアからの帰化種であるクロガケジグモ *Badumna insignis* (L.Koch, 1872)（クモ目ウシオグモ科）は、1963年に大阪府で最初に確認され、その分布は近畿地方から日本各地に拡大している。奈良県では、本種の発見（1977年）から36年が経過した。2013年に実施した奈良県下での生息調査から、奈良県における本種の分布範囲の概略と定着の状況を報告する。

P10 「大阪府の緑地におけるリター層の蛾類の種多様性と食性」

中塚久美子（大阪府立大学）、広渡俊哉（九州大学）、平井規央・石井 実・池内 健・小林茂樹（大阪府立大学）、

金沢 至（大阪市立自然史博物館）

森林のリター層に幼虫が生息する蛾類は、分解者として重要な役割を果たしていると考えられ、その種多様性や各種の生活史に関する研究は、生態系の土壌環境を評価する上で重要である。本研究では、異なるタイプの森林や緑地のリター層で生活する蛾類について、幼虫の食性を明らかにするとともに種多様性を比較した。

P11 「大阪市街地域における食糞性コガネムシ相と1930年代以降の変遷」

初宿成彦（大阪市立自然史博物館）

標本および文献の調査の結果、大阪市24区および堺市の堺区・北区・西区から13種の糞虫類（コウチュウ目コガネムシ上科の一部）が記録された。それらの中には、現在では分布していないものが含まれる。都市化の進行に伴って生息環境が失われ、すむことができなくなっていったものと考えられる。公園では近年、ペットの糞が減少しており、糞虫の生態に関連している可能性がある。

P12 「絶滅のおそれのある野生動植物種の生息域外保全～昆虫館での取り組み～オガサワラハンミョウ生息域外保全業務について」

野市康太・奥山清市・柊井理恵・村川視紀子（伊丹市昆虫館）

オガサワラハンミョウは、小笠原諸島の兄島を唯一の生息地とし、個体数は非常に少ないと推定されることから、種の保存法にて国内希少野生動植物種となっている。保全には、生息状況の把握、生息環境の維持及び改善、飼育及び人工繁殖などが必要である。当館は、環境省よりオガサワラハンミョウ生息域外保全業務を受託し、本種の保存、飼育増殖技術の習得、科学的知見の集積を目的とした飼育業務を行なっているので紹介したい。

P13 「大阪府南部におけるクワガタムシ類の生息状況」

斎藤裕介・平井規央・石井 実（大阪府立大学・生命環境）

大阪府南部におけるクワガタムシ類の現在および過去の確認記録を整理するとともに、補足的な野外調査を実施し、近年の生息状況とその変化について明らかにすることを目的とした。本研究では大阪府南部から11種のクワガタムシ類の過去および現在における生息が確認された。

P14 「人工池における水生昆虫群集の初期遷移に関する研究」

鈴木真裕・平井規央・石井 実（大阪府大院・生命・昆虫）

水生昆虫群集の初期遷移パターンとそれに及ぼす周辺環境の影響を調べるために、大阪府内の都市域と里山に人工池を設置して野外実験を行った。その結果、人工池の設置1年目において水生昆虫群集は季節変化の影響を受けながら速やかに遷移することが明らかになり、その遷移パターンは生息場所の孤立化に基づく周辺環境の違いによって異なることが示唆された。

P15 「大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにおけるチョウ類の種多様性保全」

喜多亮介・山本捺由他・乾 智洋・長谷川湧人・鈴木真裕（大阪府立大学・生命環境・緑地環境）

大阪府立大学では中百舌鳥キャンパス全体をビオトープと位置づけ、堺市街地の生物多様性保全に向けた活動を行っている。本学クラブ・里環境の会OPUでは2013年4～11月の間にチョウ類のルートセンサスを行った。その結果、コムラサキなど堺市レッドリスト掲載種を含む18種404個体を確認し、その種多様度は調査区間によって異なった。以上のことから、キャンパスにおける生物多様性保全を検討するための基礎知見が得られた。

P16 「大阪府北部におけるギフチョウ个体群の保全」

吉村忠浩・竹内 剛・平井規央・石井 実（大阪府立大学・生命環境）

大阪府北部に位置する豊能郡豊能町の鴻応山では、2011年以降、ギフチョウの生息密度の低下が確認されている。本研究では系統保存している本種の鴻応山産の個体を繁殖させて、現地に幼虫を放飼することで、个体群の補強を試みた。幼虫の追跡調査の結果、放飼した幼虫の一定数は蛹化したと考えられることから、翌春の成虫の発生状況などから補強の効果を検証する予定である。

P17 「国蝶オオムラサキを活用して地域の活性化をはかる～枚岡公園におけるオオムラサキの越冬幼虫数の変化～」
稲原小春・大濱美穂・金山美咲・松山紗月・森山みづほ・岩井泰詩・楠本凧沙・郡 太智・濱野玲奈・范 純熙・三日月茜（大阪府立枚岡樟風高等学校・農と自然系列）

生駒山におけるオオムラサキの生息環境の保全と地域のシンボル化を目指した教育活動の一環で、枚岡公園周辺のエノキ約100本を対象に越冬幼虫数のモニタリング調査を行っている。その結果、エノキ1本あたりの平均個体数は2011年～2013年の3年間でそれぞれ2.4、1.8、1.2個体と減少している事が判明した。今後もモニタリング調査を行うと共に、環境教育等を通して地域に新たな活気を生み出す活動としたい。

P18 「大阪府レッドリスト2013について」

天満和久（NPO法人大阪自然史センター）、石井 実（大阪府立大学・生命環境）、石田 惣（大阪市立自然史博物館）、上原一彦（大阪府立環境農林水産総合研究所）、梅原 徹（兵庫県立大学大学院）、木村全邦（森と水の源流館）、佐久間大輔・中条武司（大阪市立自然史博物館）、平井規央（大阪府立大学・生命環境）、平田慎一郎（きしわだ自然資料館）、道盛正樹（NPO法人大阪自然史センター）、和田 岳（大阪市立自然史博物館）

今回の大阪府レッドリストにおいて、汽水域の魚類・クモ類・海岸生物（無脊椎動物及び藻類）・その他淡水産無脊椎動物・コケ植物・菌類を新たな対象分類群に加えるとともに、保全すべき地形・地質や生態系、希少な野生動植物が生息する生物多様性ホットスポットについても選定を行った。その結果、全体的に新たに選定された種やランクが変更された種も少なくない。また、生物多様性ホットスポットとして、55カ所が選定された。

P19 「昆虫類における大阪府レッドリスト見直し」

平井規央（大阪府立大学・生命環境）、天満和久（NPO法人大阪自然史センター）、市川顕彦（日本直翅類学会）、河合正人（元あやめ池自然博物館）、坂井 誠（共生科学）、初宿成彦（大阪市立自然史博物館）、長島聖大（伊丹市昆虫館）、平田慎一郎（きしわだ自然資料館）、平松和也（大阪府立環境農林水産総合研究所）、松本吏樹郎（大阪市立自然史博物館）、宮武頼夫（元大阪市立自然史博物館）、森 康貴（双翅目談話会）、山本哲央（日本トンボ学会）

大阪府では、これまでに5500種を超える昆虫種が記録されているが、2000年の大阪府レッドデータブックでは、絶滅種12種、絶滅危惧I、II類計65種を含む186種が掲載されていた。一昨年から始まった昆虫分科会での見直し作業の結果、取りまとめたリストでは、絶滅種がコウチュウ目、チョウ目、トンボ目、カメシ目などで追加され、全てのランクを含めたレッド種の総数は前回から大幅に増加した。

P20 「大阪府クモ類レッドリストについて」

平田慎一郎（きしわだ自然資料館）、加村隆英（追手門学院大学）、田中穂積（日本蜘蛛学会）

大阪府内からは、これまで400種あまりのクモ類が記録されている。2000年の大阪府レッドデータブックでこのグループはとり扱われていなかったが、陸上の捕食性小型節足動物の中で大きな生物量を占め、陸上生態系の中で重要な地位にあるといわれる一方、分散能力が低かったり、湿地や河口域のような不安定な環境にのみ生息したりと、環境変化の影響を受けやすい種も少なくない。最近は近隣府県のレッドリストでもクモ類をとり扱う事例が増えており、

大阪府においてもあらたに対象として検討した結果、評価対象となる大阪府産27種のうち、絶滅の恐れのある種は3種（絶滅危惧I類1種、絶滅危惧II類2種）となった。

P21「大阪府レッドリスト改訂版における海岸生物の選定、及びその他無脊椎動物群のリスト改訂」

石田 惣・山西良平（大阪市立自然史博物館）、山田浩二（貝塚市立自然遊学館）、和田太一（NPO法人南港ウェットランドグループ）、渡部哲也（西宮市貝類館）、近藤高貴（大阪教育大学）、高倉耕一（大阪市立環境科学研究所）、湊 宏・松村 勲（日本貝類学会）

今回の大阪府レッドリスト改訂作業ではRDB初版で見送られていた海岸生物の選定を行った。府下の汽水・砂浜域の潮間帯に生息、または生活史の一部で利用する生物を対象とし、過去の文献、標本、調査から記録のある約580種群をリストアップしたのち、岩礁域や潮下帯が分布の中心となる種や未同定種を除いた278種を選定対象とした。各種について個体群存続リスクを点数評価し、最終的に189種を選定した。本発表ではその他の無脊椎動物群（淡水貝類、陸産貝類、その他動物）の改訂リスト案も紹介する。

P22「汽水・淡水魚類における大阪府レッドリストの見直し」

上原一彦（大阪府立環境農林水産総合研究所）、平井規央（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科）、花崎勝司（芥川緑地資料館）、山本義彦・平松和也（大阪府立環境農林水産総合研究所）

大阪府内で確認された汽水・淡水魚類のうち、絶滅のおそれのある種の総数は29種（絶滅危惧I類19種、絶滅危惧II類10種）となり、前回（2000年）の22種から7種増加した。

P23「両生類・爬虫類・哺乳類・鳥類における大阪府レッドリストの見直し」

平井規央（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科）、森 哲（京都大学大学院理学研究科）・常俊容子（大阪自然環境保全協会）・松浦宜弘（京都大学大学院理学研究科）、小海途銀次郎（大阪府鳥獣専門員）・納家 仁（日本野鳥の会大阪支部）・和田 岳（大阪市立自然史博物館）

大阪府レッドリストの見直しを行った。両生類では大阪府産17種中12種、爬虫類では大阪府産20種中7種、哺乳類では大阪府産29種中13種が、絶滅危惧種とされた。鳥類では、大阪府産300数十種の中から、大阪府内に1000羽以上生息する鳥（多数種）と毎年渡来・生息する場所が特定できない種（迷行種）を除いた181種を希少性判定対象種とし、希少性判定を行った結果、80種が、絶滅危惧種とされた。

P24「菌類から見た近畿の環境の長期的変化と大阪の菌類レッドリスト」

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

菌類の長期に渡る観測のリストは少ない。本郷次雄コレクションを活用し、近畿中部に当たる滋賀県大津市附近の環境変化の解明を試みた。これと今回作成した大阪府下の菌類レッドリストを合わせて論じてみる。

P25「大阪府レッドリスト改訂版におけるコケ植物の選定」

木村全邦（森と水の源流館）・道盛正樹（NPO法人大阪自然史センター）

平成12年に刊行された「大阪府レッドデータブック」では、残念ながらコケ植物は扱われなかったが、今回のレッドリスト改訂で扱われることになり、選定作業を行った。大阪府のコケ植物は、中島（1964）、木村・佐久間（2004）、児玉（1971、1972）でその概要が明らかにされている。今回はこれら文献、および標本による記録から蘚類355種、苔類178種を評価した結果、蘚類103種（うち絶滅3種）、苔類40種を選定した。ツノゴケ類については、対象種がなかった。大阪府では、古くからの開発の影響もあって、まとまった多様な自然環境に乏しく、近隣他府県では普通種と思われるような種でも、産地がスポット的に限られるものが多かった。その結果掲載種数が全種の約3割を占め

る結果となった。

P26 「維管束植物における大阪府レッドリストの見直しーランクが変更される種についてー」

藤井伸二（人間環境大学）、志賀 隆（新潟大学）、瀬戸 剛（大阪市立自然史博物館）、藤井俊夫（兵庫県立人と自然の博物館）、梅原 徹（兵庫県立大学）、山住一郎（大阪市立自然史博物館）、山崎俊哉（建設環境株式会社）、岡本素治（きしわだ自然資料館）、内貴章世（琉球大学）、長谷川匡弘・横川昌史・佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

2000年に公表された大阪府レッドデータブックについて、現在見直し作業を実施中である。今回の見直しの大きな変更点としては、「要注目種」のランクを無くし、そのほかのいずれかのいずれかのランクに振り分けた。今回の発表では暫定リストではあるが、前回からランクが変更となった種、新規にRDBに追加となる種について紹介する。

P27 「大阪府版レッドデータブック地形・地質版作成の試み」

中条武司（大阪市立自然史博物館）・三田村宗樹（大阪市立大学）・奥平敬元（大阪市立大学）・菅森義晃（大阪市立大学）

2000年に発表された大阪府レッドデータブックでは、生物に特化した内容だったため、大阪府で保全すべき地形や地質要素の抽出は行われなかった。しかし、近隣の京都、兵庫、和歌山、福井などでは地形・地質分野でも同様の取り組みが行われており、2012年から始まった大阪府版レッドデータブックの改訂にあたり、大阪における保全すべき地形・地質を取り上げることとした。今回はその狙い・選定基準・暫定リストを紹介する。

<編集後記>

早、2014年12月号発刊の時期となりました。今号は特集記事を組んでいませんが、多数の原稿を投稿いただいたおかげで充実したものとなりました。原稿を投稿・寄稿いただいたみなさまに感謝いたします。

本誌は迅速かつ丁寧な審査体制を“売り”のひとつとしています。大学院生の方もふるってご投稿ください。前号より、デジタル版（KONCホームページよりログイン）はカラーでご覧いただけます。

なお、編集委員外レフェリーとして、平田 慎一郎氏（きしわだ自然資料館）と上原一彦氏（大阪府立環境農林水産総合研究所）には、36号において審査にご協力いただきました。記してお礼申し上げます。

2015年も会員のみなさまにとって実り多い1年となりますことを祈念いたします。

（前迫ゆり）